薬史レター

第50号

日本薬史学会　JSHP　2008年9月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16　(財) 学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

TEL (03)3817-5821　FAX (03)3817-5830　URL *http://yakushi.umin.jp/*

日本薬史学会2008(平成20)年会のご案内
―大阪年会へのご参加をお待ちしています―

年会長　**播磨　章一**(近畿大学薬学総合研究所 客員教授)

日本薬史学会・2008年会を平成20年11月15日(土)に大阪の地、近畿大学(11月ホール)で行います。

本年会は、一般講演、特別講演およびシンポジウムの3本立の構成になっております。

一般講演は17題になります。内訳は江戸時代の古書からのくすり関連(2件)、薬史学教育に関するもの(2件)、薬史上の人物に関するもの(4件)、宗教と医薬史学に関するもの(2件)、くすりに関する史的考察(3件)および薬事行政に関するもの(4件)であります。会員各位の積極的な演題のお申し込みに感謝いたします。

一般講演に引き続き、今回の年回を大阪で開催することに鑑み、薬学・医薬の歴史では欠かせない存在である「緒方洪庵の適塾」や「くすりの町・道修町」を主題とした特別講演、シンポジウムを企画いたしました。

まず、特別講演として、科学史／化学史で著名な大阪大学名誉教授の芝 哲夫先生に「舎密局、司薬場にいたる大阪の風土」のご講演を賜ることにしております。

そのお話を受けての「くすりの道修町にいたる大阪の薬業風土」をテーマとしたシンポジウムでは、道修町の歴史に詳しい三島佑一先生により「道修町の歴史と商法」、道修町の老舗メーカー塩野香料株式会社顧問の吉原正明先生により「道修町と共に歩んだ200年」、道修町中央に鎮座されますくすりの神様“神農”さんをお祀りする少彦名神社宮司 別所俊顕先生より「道修町と神農信仰」、くすりの道修町資料館前館長 久保武雄先生から「道修町資料保存事業について」と題して、それぞれご講演いただくことになっております。本シンポジウムを通じて日本薬業のルーツともいえる道修町について、よりご理解を深めて頂ければ幸いです。

シンポジウム終了後には、近畿大学内のカフェテリアで懇親会を行います。芝　哲夫先生、シンポジストの先生方にも出席をお願いしておりますので、是非多数のご参加をお願いいたします。

なお、特別講演やシンポジウムで話題の「適塾」や「くすりの道修町資料館」は、年会場の近畿大学とはかなり離れたところにありますが、歴史小説で名高い作家司馬遼太郎の「司馬遼太郎記念館」は徒歩で10分程度のところにありますので、お立ち寄りをお奨めいたします。

日本薬史学会 2008(平成 20)年会のご案内

日　　時：平成 20 年 11 月 15 日(土)　9：00～17：45
年 会 長：播磨　章一(近畿大学 薬学総合研究所)
会　　場：近畿大学　11 月ホール・小ホール
主　　催：日本薬史学会
共　　催：近畿大学　薬学総合研究所
協　　賛：大阪府薬剤師会、大阪市薬剤師会、日本薬学会 近畿支部、近畿化学協会

特別講演：「舎密局、司薬場にいたる大阪の風土」
芝　　哲夫　先生(大阪大学名誉教授)

シンポジウム：テーマ「くすりの道修町にいたる近世の大阪の薬業風土」

一般講演：口頭発表(1 演題 15 分：発表・質疑応答 2 分を含む)　下記 プログラム参照

年会参加費：会員；¥3,000-　　非会員；¥5,000-　　学生；無料
懇 親 会：講演終了後(18：00 ～19：30)
会　　場：近畿大学内(カフェテリア・ノーベンバー)
会　　費：会員および非会員 ¥5,000-　　学生 ¥1,000-

日本薬史学会 2008(平成 20)年会 プログラム

開会の挨拶(9：00～9：15)　　近畿大学薬学総合研究所 所長　掛桶　一晃
日本薬史学会 2008 年会 年会長　播磨　章一

一般講演発表(17 題)

一般講演　午前の部(9：15～11：45)

1. 名著「江戸と北京」　小川　通孝(有限会社たちばな調剤薬局)
2. 上方落語の中の医薬品－江戸落語との比較　五位野　政彦(東京海道病院 薬剤科)
3. 松山大学薬学部医療薬学科における薬史学教育事始　牧　純(松山大学薬学部感染症学研究室)
4. 韓国近代薬学教育史－日韓併合時代を中心に　石田　純郎(中国労働衛生協会)
5. 星一と阿片事件　三澤　美和(星薬科大学 薬理学教室)

6. 日向薬(くすり)事始め(その６)－日向出身のシーボルトとポンペ門下生およびその周辺－
山本　郁男(九州保健福祉大学薬学部)
7. 歴史のなかのアポセカリ(－)イングランド初の女性開業医エリザベス・ガレット・アンダースン
柳澤　波香(津田塾大学)
8. 日本漢方古方派の先駆者、後藤艮山の医学に見られる日本的病因論
須藤　美緒(東京理科大学大学院 薬学研究科)
9. ヒンドゥー教の Dhanvantari 像と薬師如来像の類似性
奥田　潤(名城大学　薬学部)
10. 室町～江戸期の眼科書に見られる仏教医学の影響　上妻　加奈(東京理科大学大学院 薬学研究科)

昼食・休憩(11：45～13：00)

一般講演　午後の部(13：00～14：45)
11. 茶樹および茶花の史的考察　徳岡　清司(株式会社ハリマ漢方製薬)
12.「血の道」の薬の系統と王子五香散の位置づけ　荻原　通弘(日本薬史学会)
13. 薬石「無名異」：石見銀山の副産物として献上された薬について
成田　研一(島根県済生会高砂病院 薬局)
14. 薬局方としての「和剤局方」の意義　鈴木　達彦(北里研究所東洋医学総合研究所
医史学研究部)
15. 日本におけるドラッグストアの歴史に関する一考察(Ⅲ)
－ドラッグにおける調剤・在宅医療の現状－　佐藤　知樹(日本医療薬専門学校)
16. 日本の医薬品副作用被害と安全対策の歴史
高橋　春男(エーザイ株式会社
臨床研究センター)
17. 明治時代の薬業行政：大日本製薬の事例にめぐって
ヨング・ジュリア(法政大学 経済学部)

休憩(14：45～15：00)

特別講演(15：00～16：00)
「舎密局、司薬場にいたる大阪の風土」　芝　哲夫(大阪大学名誉教授)

シンポジウム(16：00～17：50)
テーマ「くすりの道修町にいたる大阪の薬業風土」
1. 道修町の歴史と商法　三島　佑一(四天王寺大学名誉教授)
2. 道修町と共に歩んだ 200 年　吉原　正明(塩野香料株式会社 顧問)
3. 道修町と神農信仰　別所　俊顕(少彦名神社宮司)
4. 道修町資料保存事業について　久保　武雄(くすりの道修町資料館前館長)
5. 総合質疑

閉会挨拶　　日本薬史学会 2008 年会 事務局長　村岡　修

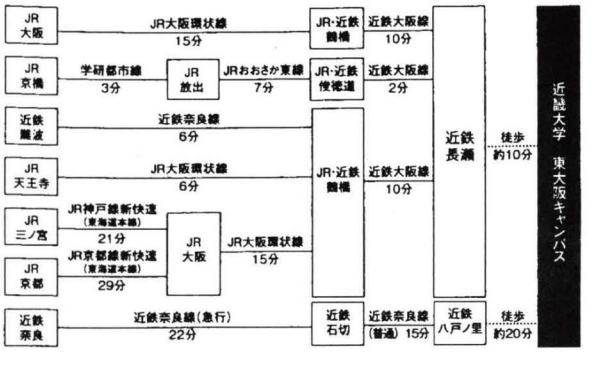
懇親会(18：00～19：30)　カフェテリア・ノーベンバー

年会参加申込：FAX の場合には「日本薬史学会年会 2008(平成 20)年会参加申込書」の項目をご記入のうえお送りください。E-mail の場合には本申込を日本薬史学会ウェブサイトからダウンロードのうえ添付形式として、またはメール本文に必要事項を記入し送信ください。
なお、事前参加につきましては、10 月 31 日をもちまして締め切らせていただき、以後の参加申込につきましては、年会当日の受付とさせていただきます。

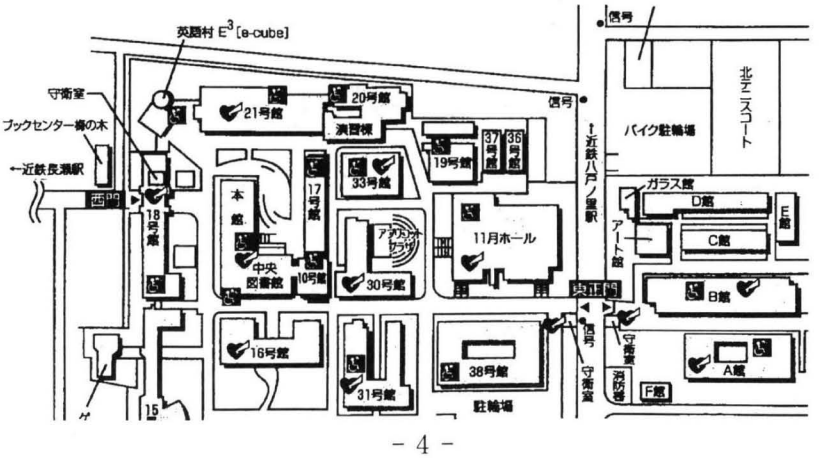
年会事務局：連絡先　近畿大学薬学総合研究所　　担当　山下 多美子
〒577-8502　東大阪市小若江 3 丁目 4 番 1 号
電話：06-6721-2332(内線 5001)　ダイヤルイン：06-6730-5880(内線 5001)
FAX：06-6729-3577　E-mail：tamiko.yamashita@itp.kindai.ac.jp

会　費：①日本薬史学会年会　会員*；¥3,000-　非会員；¥5,000-　学生；無料
*年会の共催および協賛団体の会員については、日本薬史学会会員の会費に準ずる。
②近畿大学 カフェテリア“ノーベンバー”での懇親会：
会員および非会員；¥5,000-　学生；¥1,000-

会場への交通：
■近畿大学本部　【11 月ホール】
〒577-8502　大阪府東大阪市小若江 3-4-1
TEL：06-6721-2332　FAX：06-6721-2353
近鉄大阪線・長瀬駅(各停のみ停車)下車
徒歩約 10 分 （長瀬駅東側　大学通り）
URL：http://ccpc01.cc.kindai.ac.jp/honbu/side /09_a/09hon.html



■近畿大学構内地図



日本薬史学会 2008(平成 20)年会

参加申込書

フリガナ 氏　　名	
所　　属	
住所　〒	
TEL	FAX
E-mail：	
参加費（○で囲んでください） 1. 日本薬史学会 2008(平成 20)年会 　会員*　　¥3,000- 　非会員　　¥5,000- 　学生　　無料 *本年会の共催および協賛会員につきましては、日本薬史学会会員の会費に準じます。 2. 近畿大学 カフェテリア“ノーベンバー”での懇親会 　会員および非会員　　¥5,000- 　学生　　¥1,000-	

参加申込書の送付先：

日本薬史学会 2008(平成 20)年会事務局
〒577-8502　東大阪市小若江３丁目４番１号
近畿大学 薬学総合研究所　　担当　山下 多美子
電話：代表 06-6721-2332(内線 5001)　　ダイヤルイン：06-6730-5880
FAX：06-6729-3577　E-mail：tamiko.yamashita@itp.kindai.ac.jp
本申込書を FAX でお送りいただいても構いません。

年会参加費および懇親会費の振込先：

三井住友銀行 東大阪支店(店番号 151)
普通口座　　1898741
名 義 人　　“近畿大学日本薬史学会 第 20 年会 村岡　修”

韓国医・薬史博物館見学ツアー参加者報告

ツアーを企画して

奥田　潤

今回の韓国薬史学ツアーは、山川会長はじめ筆者も参加して 10 名のグループで実施され無事終了しました。企画者として参加者の御協力に心からお礼申し上げます。ツアーについて参加者の皆様から御報告されるとの事で、私は、30 年に亘る韓国薬学者、医薬博物館館長との思い出と今後の韓国との交流をどうすべきかについて私見を述べ御参考に供したいと思います。

私が最初に韓国の薬学者とお会いしたのは第 1 回アジアオセアニア生化学会議(FAOB)が 1977 年名古屋で行われた時で、それはソウル大学薬学部生化学教室教授の李相燮博士でした。極めて優秀な生化学者で、カプサイシン(トウガラシの成分)の代謝についてユニークな研究を展開しておられた。会議終了後、エーザイのくすり博物館へ御案内したところ大変喜ばれた。その後 1979 年韓国での FAOB 会議に出席し、講演後韓国での薬師如来像や薬壷の調査をする一方、李教授に当時ソウル市内にあった韓独薬博物館を案内していただいた。その時同館の主任をしていた金夬正氏(高麗大文学部出身)とお会いした。同氏は博物館が 1995 年に忠北陰城へ移転したので、館長として 32 年勤務の後、ソウル市内の新設の許浚(ホジュン)記念博物館の館長となられた。

その後、薬師如来像や薬壷の研究で韓国の研究者に会うため、2 回国立ソウル博物館を訪ねた。

2006 年 4 月静岡大・人文学部松田純教授が研究代表者である科学研究費「薬の倫理と薬の歴史文化論的研究」に班員として招かれ、その年の 12 月 19ー23 日韓国薬史学ツアーが計画された。私は折角韓国まで班員 11 名が出かけるのであれば、韓国の薬史学の話を聞きたいと思い、李相燮名誉教授にお願いしたところ、韓国には薬史学会がないので人選に苦慮され、訪韓 1 週間前にソウル大学薬学部薬剤学教授沈昌求博士を推薦して下さった。2006 年 12 月 22 日ホテルで沈教授は「韓国の薬学史」について日本語でパワーポイントを用いて、1 時間半話して下さいました。同教授は 1948 年生まれで、東大薬学部花野学先生の研究室で 3 年間研究されていたことを後程知りました。このようなまとまった「韓国の薬学史」を聞くのは始めてでしたので、出来れば日本の薬史学会で特別講演をお願いしたいと考えていました。帰国後、電話で津谷副会長が計画されていた韓国近代薬学史セミナーが 2007 年 3 月 8 日ソウル大学天然物研究所で開かれることを知りました。その折、山川会長、津谷副会長からの電話で、沈教授を 4 月 14 日の薬史学会総会の特別講演者としてお呼びしようということになりました。そこですぐ沈先生に連絡したところ御了解が得られました。特別講演の要旨、パワーポイントがハングルで送られて来たため、名城大・経済学部の韓国出身の大学院生金俊鎬さんに翻訳をお願いし、日本語による特別講演も成功裡に終わりました。

沈先生は来日時に、金信根編著「韓国医薬事」ソウル大学出版部(A4、1046 頁)ソウル 2001、韓国薬業 100 年(Vol.1、 A4、 809 頁、Vol.2、 A4、 632 頁)薬業新聞社ソウル(2004)を私に恵与下さいました。二書ともハングルです。お読みになりたい方はお知らせ下さい。

韓国の医薬博物館については石田純郎先生に 2006 年 11 月の名古屋での年会で発表していただいたので、今回の韓国の医・薬学博物館の訪問に役立ちました。

沈先生に「韓国の薬学史」の総説の執筆をお願いしたところ了解を得ました。2008 年末には会員の皆さんに読んでいただくことが出来ると考えています。同総説が今後の韓国薬史学の研究上大きな布石となると信じています。

隣国韓国の薬史学者との交流の在り方については、両国の友好のために、韓国に薬史学会が出来れば、韓国か日本で韓日薬史学会を5年おきぐらいにどちらかの国で開催したら如何かと考えています。そのためにはハングルを理解出来るよう、日本薬史学者も努力しなければならないと感じています。

日本薬史学会・韓国医薬史の旅の印象記

山川　浩司

本会は1998年のフィレンツェ市での国際薬史学会議の後のイタリア医薬史の旅から10年振り、日本から最も近い韓国の医薬史博物館の三泊四日の旅に出た。長年、韓国の医薬史と薬師如来の研究に没頭している本会理事の朋友奥田潤先生が、是非韓国の医薬史博物館の旅に行こうとの誘いに賛同して、奥田先生の人脈を通しての企画立案により今回の旅が実現した。2008年5月27日に成田空港と中部空港よりそれぞれ出発、韓国の仁川空港で9名が合流した。空港に待っていたガイド兼通訳の安さんらとマイクロバスに乗り30日までの3泊4日の旅となった。

27日の午後、広い仁川空港からバスで漢江を渡り高速道路を一路ソウル市内の目的の「国立中央博物館」に向う。小学校の幼年時代の夏休みの一夏を過ごした時の記憶にある朝鮮は禿山であったが、現在の韓国の山や丘は緑に覆われている。韓江を渡り市内に入るとマンションウン群の林立となる。中にはビルの外側の窓に空調の室外機が取り付けられているのも一見珍しい風景であった。それでも現在の韓国は住宅が不足しているという。高速道路は日本より広くドイツのアウトバーンを思い出す。われわれを乗せたマイクロバスも懸命に飛ばしているが、乗用車と大型観光バスは二百キロ近い猛スピードで追い抜いて行く、2時過ぎに「国立中央博物館」に着く。ここは2005年に景福宮など国内からの韓国の美術工芸品が移されて開館された三階建ての巨大な博物館である。この博物館には韓国の多数の中高生が教員に引率されて見学に訪れていた。われわれはこの博物館を2時間かけて1階の考古館と歴史館から見た。博物館の内部は中央空間に敬天寺十層の石塔が聳えパリのオルセー美術館を大きくしたような構造である。二階は書画美術品と寄贈の宝物など、三階には陶国立磁器、仏教彫刻とインド、中国および日本室などのアジアの美術工芸品を見て、4時過ぎに一階入り口ホール横のミュージアムショップを物色する。夕刻にソウル市庁近くのクラシックなプレジデント・ホテルに落ち着いた後、一行揃って近くの繁華街、明洞地区のレストラン「明苑」に行った。そこでの夕食の焼肉料理は美味しかった。この地区は渋谷と新宿さらに浅草を混ぜ合わせたような所で、若い人々で賑わう明るい雰囲気で危ない感じはなかった。メガネ店や漢方医院などを訪れたが、ハングル文字が氾濫する中にエステ、寿司などの日本語の看板も見られた。

中央博物館内部、敬天寺石塔

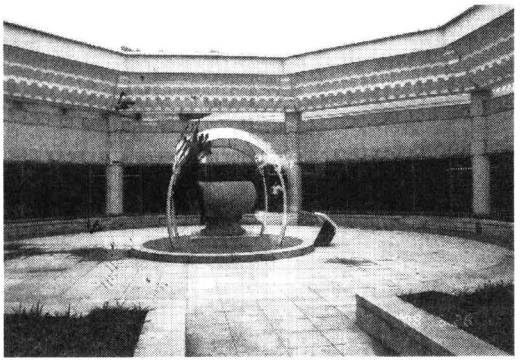
28日は忠清南道の扶余までの遠出となるので7時40分にホテル発となった、インドからの参加者が

合流、総勢 10 名(男性 6 名、女性 4 名)となった。夜半からの激しい雨の中を漢江に沿った高速道路を南東に走る。高速道路は高架ではない、一般道に入り 9 時 45 分に忠清北道大所面にある「韓独薬博物館」に着く、雨も降り止んでいた。ここの韓国ヘキスト製薬工場の敷地は美しく整備されている。薬博物館は二階建で館長の Kyung-Lock Lee さんらの職員が出迎えてくれる。医薬書、製薬器具、日中の医薬史の展示物も含め多数の名品が展示されている充実した薬博物館であった。1 時間 30 分ほど見学し分厚い当博物館の図書と記念品を全員に頂き、持参した日本酒を贈呈して 11 時 15 分に辞した。

再びバスに乗り一般道をめぐり忠清南道の「アサンの薬師如来石佛」を訪ねる。車内に積んだ弁当の匂いが昼を過ぎていることを知らせるが、訪ねる薬師如来にはなかなかお会いできない。ようやくここと思われる場所に着くが運転手やガイドさんも近くの人々に尋ねても分からないらしい。ようやく細い道を進むと小高い所に石像が見え感動であった。階段を登ると訪ねる薬師如来の石像にお目にかかれる。5.45m の大きな一枚石の立派な石佛であった。古くはこの石佛は広大な伽藍の内に建てられていた。伽藍はその後に荒廃して今は草地になりアザミの群生が慰めてくれる。この広場にビニールを敷き一同昼食の弁当を摂った。これもまた想い出の一つである。

アサン薬師如来石佛

13 時 45 分頃に再びバスに乗り一般道から高速道路に入って、昔の百済の都があった忠清南道の扶余を目指し 15 時 30 分頃に「国立扶余博物館」に着く。日本からの JTB の遊覧バスも来ている。整備された美しい園内に多数の石像と石塔が点在している中に円形の博物館が建っている。古代百済王朝の遺品や石仏像、多数の土器類が展示されている。古代の日本に仏教を伝え大きな影響をもたらした百済文化の源泉を見る。日本の信州の尖石土器博物館で国宝の縄文のビーナス像や世界最古の火炎土器などを見たが、土器は日本の方が多く残されている。これらはいずれも郵便切手になったのでよく知られている。円形の博物館の中央広場には巨大な石壷が置かれていた。一時間ほど見学してから再びバスで一路ソウルをめざし高速道路を 2 時間ほどかけて戻る。


国立扶余博物館、内庭

夕刻近くにソウル市内に入り漢江の橋を渡りバスは海鮮料理店で停車する。まずビールで喉を潤し、平たい大きなステンレス鍋で作る海鮮料理が出された。日本のうどんすきの鍋とも違い、平らで大きなステンレスの鍋の中央に少し深い窪みがあり、海鮮類を食した後にここに麺を入れて食べる料理で、並べられた漬物類の皿も美味しかったが、ステンレスの細い箸とスプーンは味気ない。食後はそれぞれの好みで見物してホテルに戻った。ソウルの街は折から米国から牛肉の輸入を認めた政府に対する、激しい反対デモが連日行なわれていた事をテレビで見た。韓国の人々の語感も民族気質も激しさを感じる。

三日目の 29 日の午前はソウルの西の漢江に面した所にある「公立許浚博物館」を見学した。途中に先日韓国の国宝第一号で焼け落ちた南大門が周辺をカバーされている場所を通る。開館時間の前に着きしばらく待って 10 時に入館した。ここでも小さい子供達が集団で訪れていた。館長の Quae-Jung KIM

さんが出迎えて案内してくださる。KIM さんは韓独薬博物館の初代館長を勤められていたが、この公立許浚博物館の設立時に引き抜かれたという。許浚の著書、東医宝鑑は江戸期の朝鮮通信使の医師と日本の医師との間で論議されたと聞いた。この許浚の著書や人物像の紹介、多数の生薬標本や昔の医薬の器具類が分類展示されている。他のスペースには宮廷医院や韓医院などが模型で作られている昔の医療施設は分かりやすい。また薬を作る器具類を体験学習できるような設備もある。屋上休憩スペースに隣接した薬草公園には色とりどりの花が美しく咲き誇り晴れ上がって漢江の眺めは良かった。この博物館を辞してから昼食は韓国の伝統鳥料理(参鶏湯)を味わった。

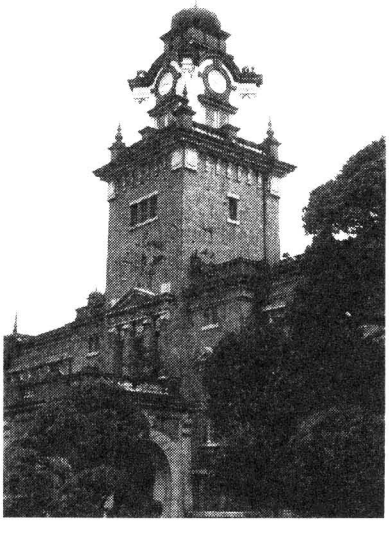
許浚像(公立許浚陵博物館内)

延世大学医学部博物館での一同

午後はソウルの西の新村にあるアメリカ人宣教師が1915 年に設立した名門の「延世大学医学部博物館」を見学した。創設 100 周年記念の特別展を開催中で学芸員の Jun Park 氏の説明を受けながら見学した。大学の園内には古い医院の建物が残されている。この博物館の 2 階は古代の土器、陶芸品、3 階には動植鉱物の標本類が展示されている大学博物館になっている。学園内には多数の男女の学生たちが行き来していて活気が見られた。

この後、予約許可を得て日本のテレビでよく知られている韓国の大統領の「青瓦台」の見学に向う。周辺は厳重に警護されている。赤いユニホーム姿のローラスケートを履いた警護巡査が観光客と一緒にカメラに収まっていた。青瓦台を見わたせる場所には警備の警官の建屋があり厳しく警護されている。

この日の見学を終えてホテルに戻り、夕刻に韓国のソウル国立大学の元薬学部長で名誉教授の李相燮先生とソウル国立大学薬学部の沈昌求教授を迎えた。沈先生は昨年の薬史学会の総会特別講演をお願いした先生、李先生は沈先生の先輩でともに奥田先生の旧知の方ある。両先生をお迎えし、夕食は韓国の焼肉料理店での懇親会となった。両先生とも日本語は堪能なので懇親会は楽しく和やかに行なわれた。日本から持参した日本酒を両先生に贈り、李先生からソウル大学の記念品の螺鈿の小箱を全員に頂いた。李先生は退官後に韓国の製薬会社の顧問をされていて、韓国の製薬会社の苦状を話された。帰国後に「日本薬史学会五十年史」を贈った。



ソウル国立大学医学部資料館
(旧京城帝国大学医学部)

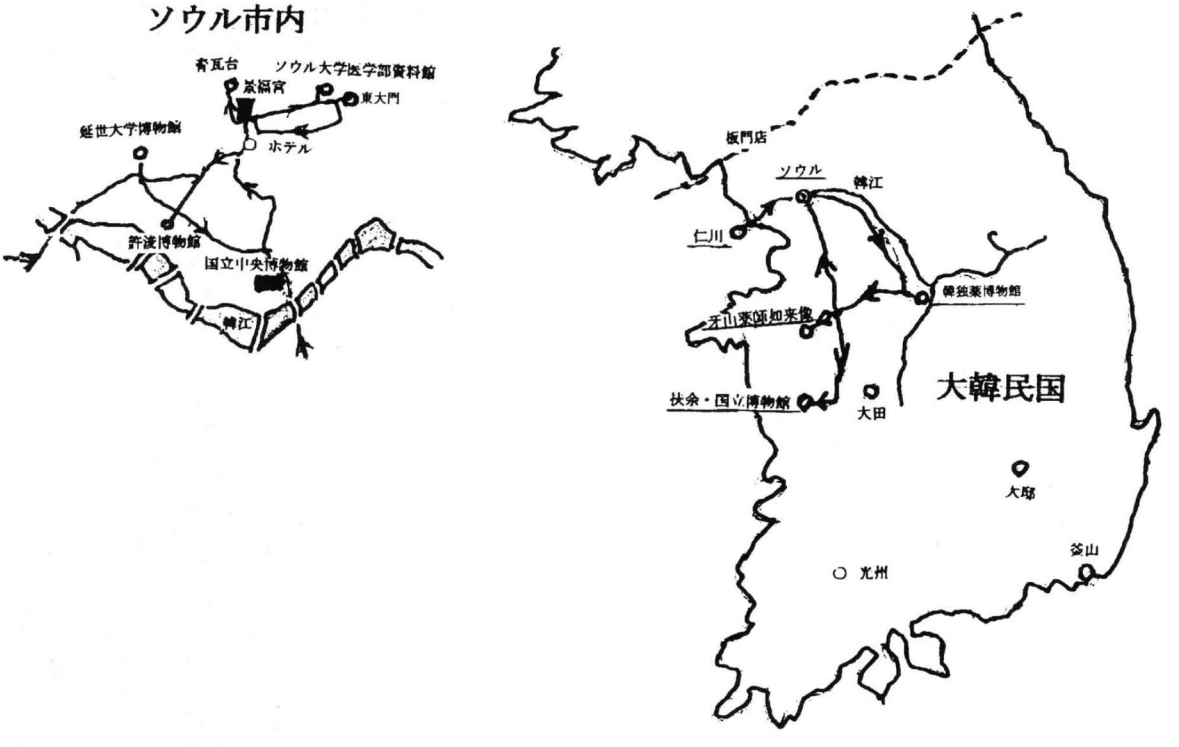
最終の 30 日、ソウルの街は朝から濃い黄砂に見舞われて周辺の眺めは霞んでいた。帰国の荷物をまとめてバスに積み、午前中は西北にある「ソウル国立大学医学部資料館」を見学した。ソウル大学病院などもここにあり、旧京城帝国大学医学部のレンガ建築の資料館を学芸員の説明で見学した。日帝植民地時代の影がここには映る。ここの博物館の展示は小規模であった。本館の前庭には韓国医学近

代化の父で種痘法を 1879 年に実施した池錫永の銅像がある。病院の周辺には日本と同じような門前調剤薬局が並んでいる。

ソウル大学を辞してからソウルの宮殿を見たいと希望して「景福宮」の見学に行く。我々のバスは東大門を曲がり東大門市場通りを進むと両側に卸市場に混じって漢方薬市場が続く。景福宮に着くと古代朝鮮王朝時代の衛兵交代の儀式が行なわれていた。古代王朝の衣装に扮した兵士たちが帽子を被り多数の旗を掲げて太鼓を打ち鳴らしながらの行進を見学した。宮殿中央の勤政殿には玉座があり、奥の香遠亭の池には鯉が泳いでいた。

ホテルに戻り夏目さんだけインドへ先に帰られた。他の一同は近くのロッテ百貨店の食品や土産物の売り場で買い物をして店内で昼食を摂った。仁川国際空港までバスを飛ばして帰国の搭乗手続きをした。ガイドの安さんとはここで別れた。空港内の免税店を見て回り成田空港と中部空港に分かれて帰国した。ソウル周辺は黄砂の被害で成田行きの航空機の出発は大幅に遅れ、飛び立った機内からの漢江や周辺の海は霞んでいてよく見えない。成田空港には夜遅く着いた。帰国の手続きを終えて大急ぎで京成スカイライナーの終電にやっと間に合った。この旅では一枚も描かなかったがスケッチブックに、韓国の旅の思い出がしみ込んでいる。

韓国医・薬史博物館見学ツアーの旅程図



許浚(ホ・ジュン)博物館を見学して

宮本　法子
(東京薬科大学薬学部 社会薬学研究室)

5月29日の午前10時前、Ref.9のナンバーが打たれたパンフレットのコピーを手にして、私たちは許浚(ホ・ジュン)博物館が開館するのを待っていた。奥田潤先生は、予め今回のツアー参加者に、行く先々のパンフレットや新聞記事そして論文等の資料を送って下さっていた。

館長のKIMさんが玄関まで迎えに来て下さり、奥田先生と再会の喜びを表すように固い握手を交わされ、その後、館内を案内して下さった。

この博物館のコンセプトは、1612年に「東医宝鑑」25巻を刊行した許浚先生の崇高な志を称える事であり、「訪ねやすく、親しみやすく、興味深い博物館」を目指しているとのことであった。説明通り、著書や医薬器、内医院と韓医院の模型室などは、見学者の視線に合わせて見やすい位置と角度が確保され、陳列の仕方などにもセンスの良さを感じた。何よりもKIM館長が許浚先生を心から崇拝し、誇りに思っている様子や初代館長としての情熱を言葉の端々から窺うことができ、いつしか私の中にも許浚像が作り上げられていった。

さて、今回の訪問先の博物館では、必ずといっていいほど小中高校生たちの団体客に出会った。この許浚博物館でも、20人ほどの3〜4歳の幼稚園児のグループが、おそろいのTシャツを着て、大人と同じく展示室や子ども向けの展示室などを先生に付き添われて見学していた。ビデオ視聴室ではアニメが上映されており、許浚先生が目の前の病人を救いたいと涙を流しながら治療に当たっている場面を、園児らがじっと見つめている姿は、かわいらしく、ほほえましいものであった。

果たして3〜4歳児に400年近くも前の医薬史上の人物や「東医宝鑑」が何であるか、理解できるのであろうか。この謎は、見学が進むにつれ、少しずつ解けていった。

ここには、体験コーナーがたくさん準備されていた。生薬を実際に手に取ったり、薬研や碾臼、乳鉢も直接触ることができ、遊びながら無意識のうちに医薬学に触れていくことができるのであった。周りの壁には、「東医宝鑑」を始めとする古典のテキストを誇らし気に持っている小学生たちや、お手製の押し花の紙でトレーや箱を作ったり、ハーブを乾かしてクッキーを焼いている子どもたちの生き生きとしたスナップ写真が貼られていた。また、館内ではクイズ形式のカラフルなテキストも販売されており、見て、触って、体全体で実感して、遊びの要素もふんだんに盛り込まれた中で、楽しみながら歴史や医学に慣れ親しんでいくことができるような工夫が随所にみられた。

学校教育の中で、急に○○を学ぶということではなく、幼児の頃から、自然に歴史や医学に興味を抱かせていくような方法と知恵に、この国の豊かさを感じた。

博物館の正面壁の大きなレリーフには、死の直前まで治療を続けたといわれる許浚と患者が描かれている。許浚は、「多くの人々を救うためにひとつでも多くの治療法を見つけたい」と奮闘し献身的な治療を行ったといわれる。

薬学教育6年制改革の渦中にいる教員として、「医療とは何か？　医療者としてのあるべき姿をより一層熱意を持って語っていく必要がある」との教訓を得られたような気がして、しばらくその場を立ち去ることができなかった。

【参考：許浚(ホ・ジュン)博物館　http://www.heojun.seoul.kr 】

国立中央博物館の半跏思惟像

高橋　文

近くて遠い国、韓国への初めての旅は、この国については全く無知であった私に多くのことを学ばせてくれた。また奥田先生をはじめとして、今回の旅で初めてお会いした方、お話しをした方を含めて、同行した先生方の暖かい人柄に触れることができた旅でもあった。

いま、旅を振り返って真先に甦ってくるのは、医薬史とあまり関係はないが、やさしく心を癒してくれた「国立中央博物館」にある金銅の弥勒菩薩半跏思惟像である。右足を左膝の上に跏し（半跏）、右手の指先を軽く頬にあて、静かにほほえみをたたえているように見えるその優雅な容姿に魅せられて、しばらくそこにたたずんだ。これほどの仏像が首都ソウルに安置されていても、多くの人が群がる様子もなく、まわりの騒音に乱されることもなく、ゆっくりと鑑賞できたのは幸いであった。

京都太秦にある広隆寺の半跏思惟像は飛鳥文化の華といわれているが、その容姿、表情はソウルの中央博物館の半跏思惟像とよく似ていることが知られている。538 年に仏教が百済から正式に伝来されたといわれるが、広隆寺は朝鮮半島から渡来した豪族の秦（はた）氏が建立した寺である。そこで近くの図書館で、半跏思惟像について調べてみたので以下簡単に記し、旅の印象記としたい。

半跏思惟像の起源は西北インドのガンダーラ地方と考えられているが、この像は東アジア地域にかけて広く存在しており、国や民族を越えて多くの人々に親しまれてきたことがうかがえる。中国から朝鮮半島に伝わった半跏思惟像は三国時代（高句麗・百済・新羅）に盛んにつくられ、そこで弥勒菩薩として信仰されていたらしい。そして朝鮮の百済から 584 年に弥勒石像が日本にもたらされたことが『日本書紀』に書かれており、これがわが国における弥勒像の最も古い記録である。この像が半跏思惟像であったかどうかは確認できないが、野中寺（やちゅうじ）(大阪府羽曳野市)等の記録などから、半跏思惟像の本像は弥勒菩薩であったとするのが大方の見解であるとされている。

菩薩は、古代インドの公式言語だったサンスクリットで「悟りを求める者」を意味する。そしてブッダ(釈尊)の教えを信じ、悩み苦しむ人々に寄り添い、自分自身の悟りよりも、他者の救済を優先しようと、懸命に努力する仏道修行者を菩薩と呼ぶ。また、「思惟」とは悟りへ至るための森厳な瞑想である。

半跏思惟像は菩薩を名乗って凡夫に寄り添い、そして完成者途上の立場にあって、悟り澄ましたりはしない。これらの点が親しみやすさを感じさせ、悟りの完成者を意味する如来にもまして、人々のあつい信仰を勝ち得てきたのであるとされている。

このような説明を理解すると、韓国への旅で出会った半跏思惟像が人々の心を惹きつけ、癒しを与えてくれることが納得できるのである。(20.7.20. 記)

韓国国宝の仏像

小川　通孝

その①、国立中央博物館「半跏思惟像」について

学生時代から仏像を見て歩くことが多かった私ですが、奈良、京都の仏像の中で強い印象を残す一番の仏像は「中宮寺　国宝　菩薩半跏像」です。今回の韓国の旅で初日に訪問する国立中央博物館には「韓国の国宝第 83 号　半跏思惟像」があり、これを拝観することが私の楽しみでありました。国立中央博物館の案内書によれば、「半跏思惟像」は、世界最高傑作の一つに挙げられると紹介をしております。韓国の「半跏思惟像」も菩薩像であります。この像は国立中央博物館 3 階の美術館Ⅱにあるということは調べておきました。しかし、多くの仏像が並ぶ 3 階をいくら探しても「半跏思惟像」はありません。宮本法子先生とあちこち探しやっと見つけた場所は、立派な「個室」でした。個室の入り口には、ハングル文字で案内が書いてあるのですが、残念ながら読めずについ、時間を取ってしまいました。しかし、個室の奥に進み、台の上に座られた 60 ㎝位の「半跏思惟像」を見て、思わず息をのみました。

中宮寺の「菩薩半跏像」の方が、優しい微笑みをたたえて、思惟の深さを感じますが、甲乙つけることは野暮というものでしょう。日本、韓国両国のともに「国宝」である 2 体の「半跏思惟像」は日本、韓国の 2 国だけでなく、全世界の人々の心に平和をもたらす美しい存在であります。

その②、牙山(アサン)石造薬師如来立像について

牙山は、忠清南道牙山郡、百済の都があった扶余(プヨ)からは比較的近いところにあります。身長が 5m45 ㎝のすらりとした身長、5 等身の薬師如来であります。12 世紀高麗時代の製作とされております。(韓国　宝物 536 号)

牙山にきた日は旅の 2 日目の 28 日、朝のソウルはあいにくの雨、まず、忠清北道にある、韓独薬博物館を見学し、牙山の薬師如来へ向かい、近くまで来た処で運転手や通訳の安さんが村(日本では村のようなところ)の人々の何人かに薬師如来の場所を聞いても皆、知らないという返答で、奥田先生が以前にきたことがあり、大丈夫とは思いながら、心細くなる心境でした。問いただしながらやっと小高い丘の上に立つ、すらりとした 5 等身の薬師如来像を見上げた時は感激いたしました。日本で多くの仏像を見た私ですが、このようにすらりと長身の仏像は知りません。

この仏像は花崗岩で彫られた石造薬師如来で、この薬師像のお姿は、ふくよかで丸味をおびたお顔、眼は半眼に見開き、高い鼻を持ち、口は小型、これがお顔の特徴です。また、耳は肩まで達し、喉には異なった 3 本のリンクが彫られており、長円形の衣服は両肩を蔽い、それは足首にまで達しております。そして、この薬師像は右手に薬壺を持ち、左手で薬壺を支えているお姿であります。

この薬師如来像のある牙山の丘陵地帯は、高麗時代には、仏教の大寺院が建っており、この薬師如来も大伽藍の中に立たれていたそうですが、寺院は荒廃し、伽藍も廃墟と化し、今は青々とアザミが群生する大自然の中に、石造薬師如来像が一人屹立しておられます。この美男で堂々とした仏は大自然の中に立つのが真にふさわしく、欣然として見えると私は実感いたしました。

薬師如来の参拝を終えて、少し下に下がった草原で昼食の弁当を摂りました。弁当の最中も郭公の鳴く声が聞こえてくる。ソウルと違った韓国の自然に触れた思いで深い 1 日となりました。

この素晴らしい薬師如来像にお会いできたのも、皆、奥田　潤先生のご研究のお陰であります。ここに心よりの御礼を申し上げる次第であります。

韓国医薬史博物館見学記

松本　和男

今回の「韓国医薬史学博物館見学」ツアーに参加させていただき、実際に日本と韓国との関係は古くは高句麗、新羅、百済の三国時代から始まっていたことを随所で目にすることができた。

二日目(5 月 28 日)に見学した牙山（アサン）市の山のふもとにある大きな「薬師如来立像」(韓国国宝・宝物)もその一つであった。左手に薬壷を持った像であり、12 世紀ごろのものといわれる。この 5.45 mもある石仏は古くは寺院の建物の中に祀られていたようであるが、今は草木に囲まれ野晒しというより青天井である。それだけに堂々と、しかも微笑みのある優しい眼差しで韓国民を見守っておられるように感じた。奥田潤先生がご推奨された所以がよく理解できた。[詳しくは奥田ら、薬史学雑誌、32、235～254(1997)を参照されたい]　また、この牙山坪村里の風景の下、ビニールゴザを敷いての昼食弁当を食べたときは奈良の明日香の村里を想い出さずにはいられなかった。

図らずも、韓国に向かう直前に出席した、古文書読み入門講座(道修町資料館)での教材は「朝鮮産人参の商に関する覚：文政 12 年(1829 年)田辺屋五兵衛が御行司衆へ出した覚書」であった。偶然、筆者が勤めていた会社の創業家ゆかりのものであり、極めてタイミングがよかった。

その 4 日後(5 月 29 日)、ソウル特別市江西区にある許浚(ホ・ジュン)博物館の玄関ロビーで陳列・販売している小学生用の薬材教科書の 1 ページを開くと朝鮮人参がでてきた。ハングル語はわからないが、瞬間に親しみを感じた。本番の展示室では、まさに本場の朝鮮人参の多くの種類を目にした。さらに、そのすぐ傍では、幼稚園児(先生に連れられ 20～30 名が集団で見学)の何人かはその人参などを手にして薬研を使って粉末化を体験している場面も見た。多分 200 年以上前から、これら人参などが朝鮮―長崎(対馬)－道修町貿易ルートのきっかけになり、道修町における製薬企業誕生につながってきたことを連想した。

このホ・ジュン博物館には、16～17 世紀における朝鮮王朝時代の最高の医師として歴史上の偉人であるホ・ジュン先生自らが執筆された「東医宝鑑」、「諺解胎産集要」や「諺解痘瘡集要」などの原著、昔の医薬器など韓国の医学・くすりの歴史を匂わせる物品が数多く展示されている。先の幼稚園児らがホ・ジュン先生の偉さとそれらの展示物を学習している背景には、Kim 館長さんのみならず韓国が国をあげて医学・薬学の歴史教育にも力をいれていることがわかった。同じようなことは、中高生ではあったが、初日(5 月 27 日)に訪問した国立中央博物館でも見かけた。このように韓国における教育のあり方にも感心した。

筆者は遅まきながら「薬史」の勉強を始めているが、独学では現実にはなかなか身につかないこともわかってきた。それだけに、今回の韓国ツアーは極めて有意義であった。

韓国医薬史の旅

田引　勢郎

日本薬史学会に入会して間もない新参の身で、不安と期待の入り混じったいささか心細い気持ちで出発日を迎えた。初めて訪れた韓国の旅行を通じて、思いがけず多くの人と交流ができ、豊かで強い印象を抱いて帰ることができた。以下、いくつか特に心に残った印象を中心として記すこととしたい。

最初に訪れた国立中央博物館では特に新羅時代の金冠に目を奪われた。我国の高松塚古墳の遺物と共通点が感じられた。銅剣や勾玉などを見ていると古代の日韓間に緊密な交流があったことが実感できた。ここには、我国でも有名な半跏思惟像が特別室に安置されており、暗い部屋の中でこの像が光に浮かび上がるのが印象的であった。

2 日目の午後、アサンの薬師如来石像を訪れた。日本の農村風景とよく似た田んぼの見える中、我々の乗ったマイクロバス１台がやっと通れるような田舎道を通ってゆくと、緑の木立に囲まれた小高いところに石造の薬師如来像が見えた。高さ５メートル余の大きな像で穏やかな顔をしておられる。横に廻って側面から見ると厚さは意外と薄く感じられた。傍らに立つ古びた案内図と説明文によると高麗時代にあった寺院の跡で、この像が唯一遺されたものである。あたりはほとんど人影も見えず、郭公などの鳥の声だけが濃い緑の木々に響いているだけである。ちょうど昼時分なので地面に敷物を敷いて弁当を食べる。薬師如来の懐に抱かれるような雰囲気で心安まるひと時であった。

3 日目に訪れた許凌博物館は、豊富な医薬史関係の道具・器具・古文書などが展示されていたが、特に印象的であったのは、かっての宮廷における医院の模型であった。薬品の調製場面や患者の診療場面などが人形を使って再現されていた。また、ここには薬研や乳鉢・乳棒などを実際に使って見学者が薬の調製などを体験できるようなコーナーが設けられており、単に過去の遺物を展示するだけでなく身近なものとして理解してもらおうとする意欲が感じられた。この博物館だけに限らず、訪問した他の施設でも先生に引率された子供たちの姿が多くみられたこともこの旅行を通じて印象に残ったことである。

十分な予備知識もないままに参加した旅行であったが、施設の見学を通じて医薬史の一端を体感できただけでなく、日程が進むにつれて同行の方々とも打ち解けることができ、食事時やバスの中、ホテルの部屋での会話など心に残るものが多く、楽しい旅行であった。最後にこの企画をしていただき、また詳細な資料まで事前に提供して下さった奥田先生に感謝申上げる。

韓国医薬史博物館見学ツアーに参加して

夏目　葉子

奥田潤先生からのお誘いと充実した見学内容に参加を即答した。2008 年 5 月 27 日、成田からソウルへ向かう予定であった。しかし都合で 27 日の午後デリーを出発。香港を経由し、28 日早朝 4 時に大雨の仁川空港に到着。4 時 20 分のリムジンバスに乗り込み、5 時 30 分にプレジデントホテルに到着。朝

食中の諸先生方に慌ただしく御挨拶をし、無事合流することができた。
○韓獨薬博物館で製薬器具、国宝「東医宝鑑」、小さな薬師像、世界の薬学史に関する文献等、すばらしい展示物を見学。日韓併合期、朝鮮戦争前後の混乱期も薬局方を改正し、国家試験を行い、韓国の薬学を守り続けたことを知り、韓国人の強い精神力と賢明さに感心した。
○アサンの薬師如来石像は、鄙びた畑や草地に囲まれた小さな丘にあった。1,000 年以上の時空を眺めてきた無垢な一枚石の薬師如来は、「苦悩は永遠につづくものではなく、受け止め方なのだよ」と、空気を通じて静かに語りかけてきた。「これが一番、すばらしいです！」と感激されていた小川通孝先生の姿が今も思い出される。
○朝鮮史では百済王朝のことを、インド～チベット～魏～百済と伝来した仏教を仏像や経典で広めるため、優れた技術者たちが大学と呼ばれる集団工房で実用的で独創的な博物を発明し、疫病から民を守り、富国の手段を広めた韓国初の王朝として取り上げている。オンドル、絹布染色、初期陶磁器、鋳銅、国産紙もこの時代の博物である。国立扶余博物館には百済時代の品々が展示され、百済は日本の仏教文化の出発地であり、扶余は大和路に似た風情であった。
○韓国ドラマ版「許凌」を見て許凌博物館見学に備えた。博物館では著書、生薬標本、宮廷医院の模型が展示され、生涯患者の傍にいた許凌像を人間的に説明していた。妾腹の許凌は青年時代に失敗、挫折、絶望を経験し、盗賊や明との高級薬剤の密貿易をして退廃的な生活を送ったという。一本の鍼が人間を蘇生させることに感銘し、田舎の医院の下働きで煎じ薬の水汲み、血や汚物のついた包帯を洗うことから彼の医師人生は始まった。患者のどんな小さな言葉にも耳を傾け、告知の重大さや患者や疾病に対し謙虚である医師の倫理を学んだ。科挙(医科)試験に主席合格すると、人生の階段をゆっくりと登りながら最後には御医になるが、民のため疫病の流行防止に取り組み、後世には体系的医学の集大成として「東医宝鑑」を執筆した。館長から直接説明を受けられたことが、このツアー参加の大きな収穫であった。見学に来た地域の幼稚園児が無心に許凌のアニメを見入る光景から、日本の医療教育のスタートの在り方について考えさせられた。最後に、若輩で２日目から参加の私を、気持ちよく迎え入れて下さった高名な諸先生方に心から感謝し、機会があればまた御一緒したいと思っている。韓国医薬史を吟味する、深いツアーであった。

韓国医薬史博物館の旅の私的感想

四塚　　勝

薬史学会には新参で、学会の行事に参加したこともなく、ほとんどの参加者の方々とも初対面でしたが、よく企画され実行されたツアーで充実した三泊四日間を充分楽しむことが出来ました。偏に、奥田先生、山川先生はじめ主だった方々のご尽力と同行の方々の広く深い学識とお人柄の賜物と感謝しています。このことを申し述べた上で、少し別の側面から極めて私的で率直な感想で紙面を汚すことをお許しいただきたいと思います。

近代薬学や製薬業が確立したのは、偶然ではあるが、わが国が朝鮮半島を支配した時期とかなり重複する。朝鮮半島の薬学・薬業の発展に日本の果たした役割が少なくないことは最近刊の薬史学雑誌でも

論じられている。今回の各訪問先でも、年表などに事実関係が淡々と記載されていることが確認できた。種々困難な事情は容易に予想できるが、それを乗り越えて両国(出来れば北朝鮮も、と言いたいが当分それは望むべくもないだろう)共同で史実がより詳細に明らかにされる日がくることを期待したい。

全体の日程については、韓国発着便が特定されていたため融通性が著しく欠けていた。この機会にもう少し韓国を見ておきたいとか、仕事の関係先を訪問したい、或いは地方空港から出発したい、という方もあったのではなかろうか？ 一両日前に韓国に入り体調調整の上、ツアーに参加することが出来たら、という方もあったかも知れない。将来のこの種のツアーでは現地での合流・参加(業界用語でいう "Land Only" での参加)も可能なように配慮することが望ましいように思われた。

薬史とは離れるが、韓国の山も平野も緑が多いことに改めて感心させられた。昔、よく耳にした『朝鮮の禿山』の面影はなかった．経済発展にともない治山治水の実績も上がっているのであろう。山々が禿山だったころ、『ひかり』『のぞみ』、それに『大陸』『興亜』という名の寝台急行が彼の地を疾走していたことを知る人も少なくなった。　それでいいのかも知れないと、自己を納得させた4日間でもあった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

マンガ、コミックと薬(追補)

五位野　政彦(東京海道病院)

筆者は2006年に、この薬史レター誌上でマンガ・コミックに登場する医薬品について述べました。それから2年以上が経過しています。ここでは前回書ききれなかったこと、この2年の間に追加されたことなどを報告します。

まず日本最古の漫画といわれる「鳥獣人物戯画」のことです。ここには想像上の動物や植物が多く描かれています。このなかに、薬用として用いられたものが描かれているでしょうか。もし描かれているとすると、日本のマンガと薬学が12世紀からつながることになります。この点は会員諸兄姉のご意見をいただきたいと思います。

薬剤師の漫画家・コミック作家について追加します。前回は竹内直子氏だけを挙げました。ほかに薬剤師であるコミック作家には新井葉月氏がいます。彼女は東京薬科大学の卒業生であり、現在でも薬局勤務のかたわら、調剤薬局勤務の若手女性薬剤師が主人公の作品「薬やりかちゃん」を発表しています。おそらくこれは薬剤師を主人公とした、日本で初めてのストーリー漫画です(「日経DI」、2007年3月)。作品の内容は日常生活から調剤ミスまで多岐にわたっています。今後薬局薬剤師業務の拡大(薬局製剤、在宅医療、学校薬剤師、実務実習指導ほか)にともない、主人公はこれからも悩み、そして活躍してくれることでしょう。

現在日経DI誌上で連載されている「薬剤師道一直線」の4コマ漫画の作者は、まがりひろあき氏です。2008年7月号の作品には「薬局神」「薬局王」が出てきます。それぞれがギリシャ神話風(アスクレピオス風)と中世ヨーロッパ風(フリードリヒ2世風)の衣装であり、日本の近代薬局は欧州が原点であ

るという表現になっています。残念ながら少彦名神(神農)や長井長義ではないのです。

「PharmaNext」誌にもコミックが掲載されています。「薬剤師 MIKI」(作：井手口直子、画：しおざき忍)は女性薬剤師のキャリアアップを描くものです。

「のらくろ」「サザエさん」に登場する医薬品、薬学的事項については、筆者が日本薬学会年会(2007：富山、2008：横浜)において改めて報告しました。これらについては追ってペーパーにしたいと考えております。

前回あまりふれなかったライトノベル(ラノベ)に出てくる医薬品について実例をあげます。まず実際に医薬品名が出てくるものです。現在もっとも人口に膾炙しているであろうラノベのひとつに「涼宮ハルヒの憂鬱」(谷川流)があります。そのなかに、どうしていいかわからない状況をコミカルに表現するのに医薬品名が出てきます。すなわち、'飲む毒の種類は青酸カリがいいかストリキニーネがいいかと訊かれた殺人事件の被害者のような顔でうつむ'いた少女です。この作品にこのふたつの薬品を使う場面はありません。しかし作者は、読者がこの有名な薬物を知っているという前提で書いており、実際ラノベの読者層はこれらに限らず有名な毒物の名称を知っていることでしょう。「毒薬の手帳」で澁澤龍彦は、「毒という言葉には(中略)奇妙に魔術的な、幻惑的な響きがある」としています。ラノベの読者層がこの響きに感応することは想像に難くありません。ラノベではありませんが、米国の SF 作家アシモフの短編には、「GIFT」という単語からシアン酸が推理される話もあります。

ラノベは SF あるいはファンタジーと呼ばれる小説の流れを汲んでいます。このうち「ジュブナイル」と呼ばれた作品には現在でもスタンダード/古典として読まれている作品があります。「時をかける少女」(筒井康隆)はその頂点に位置するでしょう。主人公はラベンダーの匂いにより特殊能力(身体移動、時間跳躍)を持ちます。医薬品としてではなく、なにか特殊な化合物(ここではラベンダー：植物：の芳香成分)により特殊な能力が生じる、というエピソードになります。これは魔法薬などが多く登場してもふしぎではないラノベの特長に近いものでしょう。

この作品に登場する未来人は大学で薬学を学んでいます。彼はクロッカス・ジルヴィウスという身体能力刺激剤を創り出します。ラベンダーがここに関わる設定になっています。薬学の歴史のなかに特筆すべき作品のひとつというべきでしょう。

さて、特撮ヒーローもの(戦隊もの)と呼ばれるテレビシリーズには'白煙と発泡する液体の入ったマイヤー'が置いてある'悪の科学者の実験室'がありませんか。なにか化合物を製造し、その毒性をもって人類に害悪をなすという設定(演出)でしょう。

逆に人類に恩恵をもたらす医薬品の国産化をおこない、その業績が伝記漫画になった例があります。ハンセン氏病薬「プロミン」をすべての患者のもとに届くようにした石館守三先生の生涯が小中学生向けの漫画として出版されています。タイトルは「少年期の誓いを貫いた薬学のパイオニア　石館守三」。残念ながら非売品のため、筆者も実物を見たことはありません。

高校生が主人公のコミックの中で将来なりたい職業として、医師(「セーラームーン」、「らきすた」)、獣医「あずまんが大王」、弁護士(「らきすた」「すくーるらんぶる」)が挙げられていますが、薬剤師はほとんどありません。筆者は野口英世の伝記を読んで感動した覚えがあります。前記の石館先生の伝記など、薬学者の業績がティーンエイジャーに広く読まれるものが出来ることを望みます。

奈 良 茶

杉山　茂

月刊「文芸春秋」2008年6月号P.77に作家の阿川弘之さんが「奈良茶」について書いていらっしゃるので、茶は薬の一種でもある事から少し解説を加えてみたい。

日本で茶が飲まれたのは何時かはいまだ不明である。文献的には奈良時代、聖武天皇が儀式の中で茶礼を行ったとあるが、この茶が今の緑茶である証拠はない。

茶の原産地・使用の歴史については、最近では播磨章一先生等(薬史学雑誌、43巻、P.16(2008))が詳説されており、著者も茶のルーツ(薬史学雑誌、40巻、P.98(2005))の論文を出しているので参考にされたい。

ご承知の様に緑茶は大別すると、抹茶と煎茶になる。茶は生薬であるから抹茶は別として濃く煮立てれば煎剤となり、熱湯にさっと通せば茶剤となる。抹茶は濃茶と薄茶に分けられる。煎茶は針葉状で玉露、煎茶、番茶に区分される。

茶の生産地には山城、大和、近江、伊勢、駿河、伊予、土佐、肥前、肥後、薩摩、武蔵の狭山、川越等があり、それぞれに歴史がある。

中国での茶の歴史は古くて当然だが、日本でも飲茶の歴史は古い。多くのヒントを与えてくれるのは栄西の〔喫茶養生記〕である。栄西は茶の事をはっきりと仙薬としている。梵字の阿は最高の至上の意味を持つ。阿仙薬は彼の造語であろう。鑑真の処方に無上茶として入っている。

話がそれたが鎌倉期から室町時代の天下一の銘茶は、栂尾の産であってこれを本茶と称し、宇治、仁和寺、葉室、醍醐、般若寺、神尾、大和の宝尾、伊勢の阿部、駿河の清見寺、武蔵の川越、埼玉の狭山茶を非茶とした。室町時代には中国からも多数の品種が輸入されている。足利義満の肩入れで「宇治七園」が拓かれ、朝日、若盛、妙楽、琵琶、川下、奥の山、宇文字等の名品が生まれた。

僧侶と武家の間で茶の効用は評価されていた。僧侶は座禅の際の眠気覚まし、武家は酒が入るから一朝事ある際の飲物として好適であった。イスラム圏ではメッカで一晩中コーランを唱える為に茶を飲み続ける。中国でも座禅中に食物を断って飲茶を続け「茶積」と言う中毒状態で、肌が黄色になり、痩せて胸、腹が膨れて苦しくなる。これらはカフェインの副作用である。このような場合磨積丸等の薬剤を与える。「茶癖」を治すには番椒、脂麻を使った。

中国の茶の一般的な使用は、唐、明からで、明の医者で呉継と言う人が千里茶というのを作った。内容は細茶、カテキン、薄荷を密で固めて丸薬にしたもので、千里歩いても疲労を感じないと売り込んだ。茶神陸羽の「続茶経七之事」に出ている。茶の配薬はこのほか明の孫一奎医師の「茶調散」で黄芩、川芎に見られるだけである。頭痛に有効。

日本でも茶の使用が広まったのは、その色と味と香りが日本人の感覚にマッチしたからだ。中国では北方騎馬民族と友好関係を保ち、かつ優れた軍馬を得るための交易に茶は不可欠であった。

鎌倉時代から室町時代にかけて公家と武家の間に流行したのが「闘茶」である。10服から100服の茶を飲み比べて茶の銘柄を推測し金銭を賭けた。最後は酒宴である。

次に入って来たのが「唐様の茶」である。座敷を金襴飾りで派手に飾り付け、高価な器物道具を置き並べ、高級な飲食品を運び込み、高価な掛け金で闘茶を行い、最後は酒宴になる。更に歌舞音曲を添えながら飲めや歌えの乱痴気騒ぎが特長である。

室町時代になると富裕な商人層が増加し、それが民衆の「茶寄り合」になった。今まで公家、武家の歌舞音曲であった田楽、能楽、狂言、放歌、操り(傀儡)を素人の富裕な商人その子等が面白可笑しく演じた。この座敷には、風呂も設けられていた。

奈良は畿内につぐ商業都市であり、有名寺院があり、富裕な町であった。奈良の「茶寄り合」は盛大だった。これを奈良茶と言う。広い座敷を設け闘茶が行われ、茶香服ないし茶歌舞伎と呼ばれた。茶を運ぶ人を茶番と呼び、座敷を取り持つ女を「茶国」と言った。双六や連歌をする人もおり、演劇も行われ滑稽狂言を茶番狂言といい、滑稽浄瑠璃を茶利とした。芸を行う役者を茶番師とする。ここではあくまで地唄、土地の言葉を使いその芸の内容は滑稽・諧謔を旨とし、琵琶、扇拍子、新入りの三味線等で調子をとり、人々を笑わせる、くつろがせるのが趣旨であった。茶番劇、茶化すと言う言葉は今でも残り、茶々は面白い、可愛いと言う意味だった。奈良茶は民衆のエネルギーを遊びに向かわせ、それを芸術的に高める一過程だった。茶漬飯は最後の御馳走だったかもしれない。

京都でも「茶寄り合」が盛んに行われ、その芸を芸術的に高めた有名人が出た。芸を職業とする一団が出来て、京の川原で興行が行われた。お国歌舞伎もその典型例である。

この間戦国時代「茶の湯」が流行し始めた、侘び寂びの世界が明日をも知らぬ武家に広まった。その祖の一人武野紹鴎は父が三好家の皮具足の納入で富をなした。千利休は納屋衆の出で雪駄の裏側の皮革の製造で財をなしたと言われている。共に民衆が豊になり、生まれた芸術である。此等茶の湯の宗匠は皮革を扱う賤民の出である。

ちなみに足利幕府の職制に同朋衆と言う一団があり、初期には将軍にはべって専ら滑稽、諧謔をもって、点茶また座興をして座を盛り上げる軽輩、今で言う「たいこもち」であったが足利義政の時代には、能阿弥、芸阿弥、相阿弥と歴代の芸術家を生み、能阿弥は書画、連歌、点茶、挿花、作庭に優れ、芸阿弥も画で一家を成し、中でも相阿弥は詩文、連歌、庭造、挿花、点茶に優れ、銀閣寺の作庭に関わったとされる。室町時代は日本文化の発祥期であった。

第1回 柴田フォーラムの報告

末廣　雅也

日本薬史学会フォーラムの準備を進めて来た企画委員会の願いが叶って薬史レター第 49 号に予告した第1回のフォーラムを8月5日、柴田承二名誉会員に話題提供をお願いして、昭和大学で開催し 25 名が参加した。

先ず、門下生で正倉院薬物調査団にも共同研究者として加わった相見則郎評議員から「蟻が象を紹介するようなものであるが、柴田先生からは研究の面白さを教えて頂いた」との紹介の後、先生の祖父の柴田承桂と長井長義が明治新政府の第一回留学生として明治3年ベルリンへ赴かれたときのエピソードから始まり、「日本の薬学」の歩んできた道と先生御自身の研究生活とについて 1 時間半にわたって感銘深いお話を伺った。記録は薬史学雑誌に掲載する準備を進めている。

その後で韓国医・薬史学博物館見学ツアーの写真を小川理事がパワーポイントで説明した。

会場の準備など昭和大学関係者にお世話になったことを感謝する。